

《ざわざわ……さー》

（草の揺れる音、風の流れる音）

ノラ

「はっはっは……！」

町の外壁の外。

モンスターも現れないか、現れても小さく弱いモノしか出ないその場所
はノラは走っている。

既に何週も走っているのだろうその額には、汗が幾つも浮かび、息も今
にも絶え絶えといった様子であった。

ノラ

「ほん、つとに……っ！」

なん、週……走らせるん、だよ！ お……っさあん！！」

ひーひーという息切れの中、ノラがたまらないといった様子で文句を吐
き出す。

その声は彼女のすぐ後ろで、冒険者としての装備を纏った姿で涼しい顔
をして走っている貴方へと向けられたもののようであった。

【鍛えて欲しいって言ったのはそっちだろう？

足の速さは認めてるけど、冒険者は体力勝負だ。

活かせるだけの体力をまず身につけなきゃ何の意味もないからぞ】
つと、からかうように貴方が告げる。

ノラ

「そう、かも……しれない、けど……ぜーはー、ぜーはー！
オレ、が……思ってた、訓練って……こういうのじゃ、なくてえ……
っ！

もっと、戦うとか、そういう……訓練だって、思ってたのに……さ
あ！！」

思っていた訓練ではなかったためか、ノラが不満そうに途切れがちな息のまま必死に文句を言う。

貴方はその声を聞きながら、小さく笑う。

かつて自分もそうであった冒険者になろうとする者なら、誰でも最初
思うだろうその考えが微笑ましかったのかもしれない。

だが、貴方は彼女の願いを聞き入れ共に冒険者をやろうと決めた。……
だからこそ、退屈だと言われても基礎の基礎から彼女に仕込むのを止
めるつもりはなかったのだ。

【文句は言わない約束だろう？

支える体がしっかりしてなきや、技術なんて付け焼刃であっさり折れる
もんさ。

それが嫌だってんなら、やっぱ家で待ってて貰うしかないかもなあ？】

ノラ

「くっ……ぬおっ！ オレが、それは嫌だって、言ったの……分かつて
る、癖にいつ！

ああ、くそっ！ 分かった、よお！ 走れば、いいんだろ、走れ……ばあっ！！」

貴方がノラにからかうように言葉を告げると、彼女は見る間に顔を赤くし怒り出す。

単純な手に素直にやる気を出してくれる少女が愛おしくて、貴方はつい、また笑みを溢す。

ついでに、少しばかり悪戯心が湧いてしまい、走る彼女に併走するように体を寄せ。

【ついでに、体力がつけばその分夜の方も長く楽しめるようになるかもしれないしな？

体力が上がった分だけ、まだまだ色んな”遊び方“もあるんだし、可愛がってやれるぞ？】

などと、愛しい少女の耳へとからかい半分、本気半分な年上からのたちの悪い冗談を聞かせてみせる。

ノラ

「んな……！？」

予想通りノラが顔を赤くし言葉に詰まるのを見届けると、そのまま貴方は足を速め少女の先を走り出す。

顔を赤くした少女は、恥ずかしさと怒りに震えるように肩でしていたはずの息をより荒くしながらも、必死に貴方を追いかける。

《だだだだ》

(走る速さが強まる音)

ノラ

「は、走ってる……最中にい！

変な、冗談……言うんじゃ、ねえよお！

この、おっさんの、ドスケベッ！ ヘンタイッ！

待て、待ちやがれえ！！」

怒りに任せ、先ほどよりもペースを速めるノラにギリギリ追いつかれな
い程度に速さを調整しながら、彼女に見えないよう貴方は大きな笑みを
浮かべる。

それは、訓練が終わった後に機嫌を損ねているだろう彼女に殴られるだ
ろうと思いつながらも、こうして過ごせる日々を手に出れた幸せを、噛み
締めたためであった。

ノラ

「この、クソ！ 待て、待てって……おっさん！！

何が、オレに手を出す気はなかっただっ！

完全に、ムツツリなドスケベ親父じゃねえかあ！

このっ、このお……一発、殴らせろおおおお！！」

明るい日差しの下、怒るノラの怒声を浴びながらも、貴方とノラは走り
続ける。

今日や明日に訪れるようなすぐになれるものではないが、お互いが望んだ未来に近付くために、共に日々を積み重ねていける……その幸せを感じながら。

ノラ

「くそ、ああ……もお！」

絶対、ゆるさねえからなあ！

……おっさんの、バカヤロー……っ！！」